

千種のあゆみ

千種地区まちづくり協議会 鎗田功

はじめに

市原市千種地区は、旧千種村（松ヶ島、青柳台、北青柳、西青柳、今津朝山、白塚、柏原）に東海地区の谷島野が加わり、さらに、平成28年4月には、千種1・2丁目町会、千種3・4丁目町会が設立加入により、現在は13町会で構成されている。

千種地区は、五井と姉崎の中間に位置しており、過去の市町村合併において旧千種村を分村した経緯がある。そのため、地区内の町会は現在も市原市の町会長連合会においては、五井と姉崎に分かれて所属するという状況が続いている。

東京湾に面した千種地区は、現在臨海部は遠浅の海を埋め立てて造成された土地に、我が国を代表する石油化学コンビナートが形成されているが、昔は漁業と農業が盛んに行なわれた自然に恵まれた農漁村集落であった。寿司ネタの「アオヤギ」は、当地区の青柳海岸で沢山採れた「バカガイ」にバカという名称が適切でないとして、採取地の地名の「青柳」が語源となってその名前が付けられたものである。

市原市の統計によると、千種地区は平成30年4月1日現在、世帯数は7,183世帯、人口は15,724人となっており、10年前の14,159人と比べ10%強人口が増加している。これは、昔からこの地域に居住する住民に加え、新たに転入してきた住民が多くなっていることを示している。

私は歴史問題については素人であるが、伝統ある千種について、その名称の由来や地域の特徴などを、新たに千種地区に居住することとなった方々や若い人に伝えていきたいと考え、千葉県立中央図書館や市原市立中央図書館の資料や文献をもとに『千種のあゆみ』として総説的にまとめた。

1 千種村の名称の由来

明治22年4月1日の町村制施行の旧町村合併に係る千葉県告示

『千種村は、合併した村に多少大小あるが、一つの村の名前を採用するわけに行かなかったことから、昔この地区の海岸を「千種浦」と呼んだことから、その名を取りこの名称とした』

町村制施行に際し、青柳村、今津朝山村、白塚村、柏原村（松ヶ島村は後に加わる）の4ヶ村の代表者を集めて新村名をきめるための協議が行われたが、三日三晩協議しても、それぞれ自村の有利になることばかり発言し決まらなかった。

このようなことから、青柳村天王河原の有力者が、このたびの村名は幸いに村の下が海であるから、古い歌に「千種の浦」という歌がある。この千種をとって「千種村」としてはどうか、と提案した。これにより、それまで自己主張してきた各村の代表者たちは、どこ村にも利害関係がないことから賛成した。

「千種」の出典となった「夫木集（ふぼくしゅう）」にある古歌

咲匂う千種の浦の汐風に秋は色々の浪ぞよせくる 法印定円

色々のかひ(貝)ありてこそひろわるれ千種の浜をあさるまにまに 読み人知らず

夫木集（夫木和歌抄）：鎌倉時代後期の私選和歌集。万葉以降の和歌のうちから従来の選に漏れた約17,350首を四季・雑に部立し、さらに歌題によって分類した類題和歌集（大辞林）

2 万葉集にみる千種

万葉集は日本最古の歌集で、奈良時代の末に20巻の形に編纂されたと考えられる。

万葉集に収載された和歌は仁徳天皇（在位期間：313～399年）の時代から淳仁天皇（在位期間：758～764年）の時代に至る約400年間の和歌で、その総数は約4,500首余に及ぶものである。

万葉集は、8世紀に大伴家持が大体現在の形にまとめたといわれている。家持は宝亀5年（774）9月に上総国守を命ぜられており、市原に居住していたことがあるが、市原を詠んだ歌は残っていない。

万葉集の中には、安房、上総、下総に関連する和歌が46首収められている。そのうち市原市に関連する和歌は9首である。さらにその中の2首が千種地区を題材としている。

千種地区を題材とした和歌

夏麻引く 海上湯の 沖つ洲に 鳥はすだけど 君はおともせず（巻7・1176）

夏麻引く 海上湯の 沖つ渚に 船はとどめむ さ夜更けにけり（巻14・3348）

池田茂編著：房総の万葉 新典社(1987. 11. 18)

3 千種村の誕生と市町村合併

明治4年：廃藩置県を経て同6年に千葉県の間轄

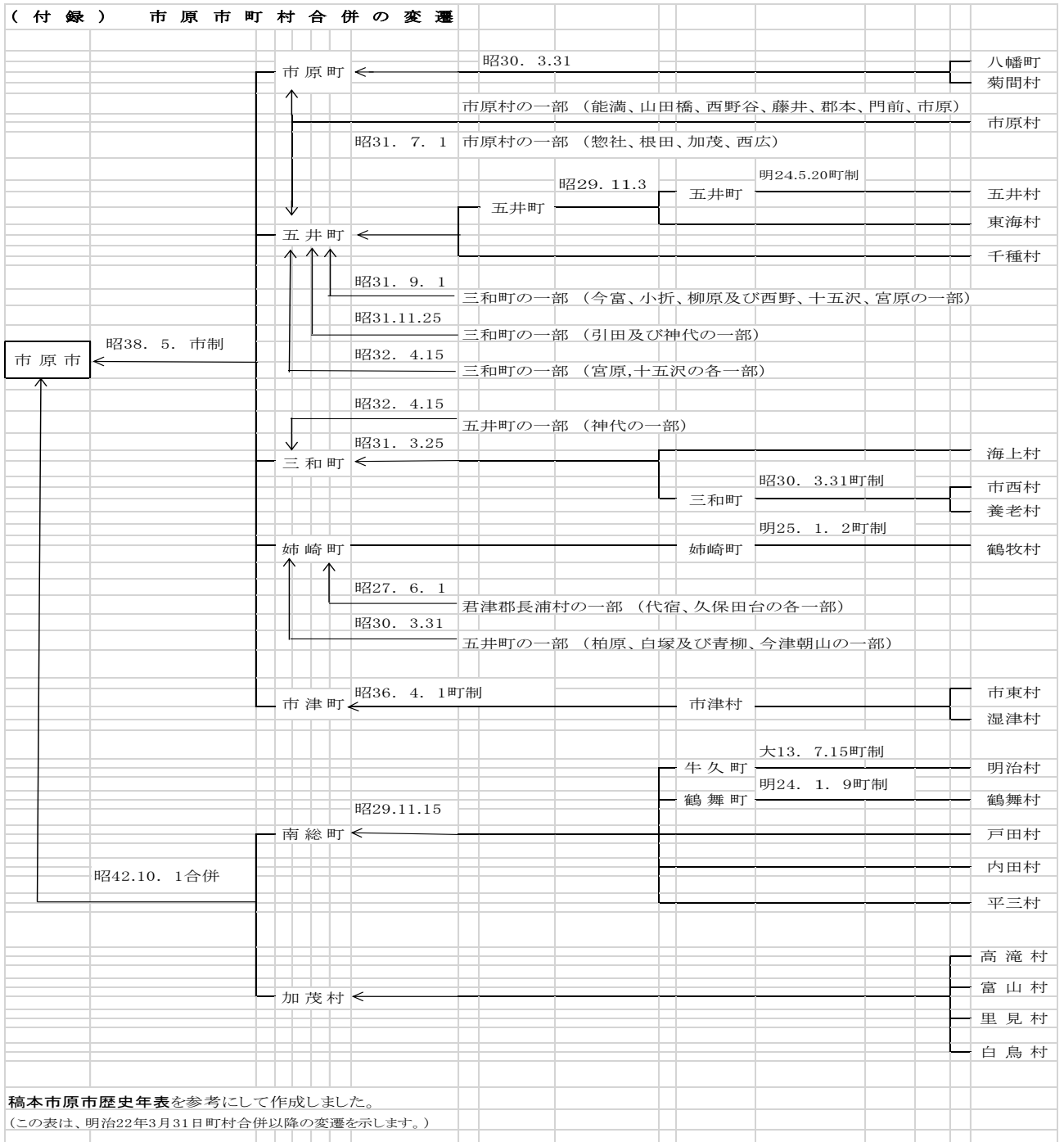
8年：天王河原村を青柳村に合併

11年：郡区町村編成法施行。青柳、白塚の2村、今津朝山、柏原の2村は各々村連合を組織し、又松ヶ島村は出津村他2村とともに村連合を組織した。

17年：戸長役場所轄区域の見直し。青柳、今津朝山、柏原、白塚の4村は、同一戸長役場、松ヶ島村は廿五里村他5ヶ村と他の同一の戸長役場に属した。

22年：市制及び町村制施行。松ヶ島、青柳、今津朝山、柏原、白塚の5ヶ村が合併し千種村が誕生。

昭和30年：町村合併促進法に基づき、3月30日に五井町と合併し、さらに同31日に今津朝山、白塚、柏原の3部落が姉崎町に編入され、千種村は2町に分村。



4 千種村の五井町と姉崎町への分村と小中学校の変遷

昭和30年3月30日：千種村は五井町と合併

31日：今津朝山、白塚、柏原は五井町から分離、姉崎町と合併

千種村は五井と姉崎に分村、千種村立千種中学校は廃校

五井町立千種小学校 (千種村立千種小学校)：青柳と松ヶ島の児童

姉崎町立朝山小学校 (旧千種中学校の施設)：今津朝山、白塚、柏原の児童

昭和45年4月：朝山小・千種小を統合し、市原市立千種小学校創設

62年4月：市原市立千種中学校創設

小学校を卒業すると、千種小の生徒は五井中学校へ、朝山小の生徒は姉崎中学校へそれぞれ進学した。このような状況は、昭和38年に五井町と姉崎町等が合併して市原市が誕生し、朝山小と千種小の統合後も継続した。現在の千種中学校が創設されたのは、旧千種中学校廃校後30年以上経過した昭和62年4月のことである。

このように、旧千種村が分村したことにより、地域の小中学生の教育環境に大きな変化を与えるとともに、子供たちに不便な思いをさせたこととなり、地域の児童生徒が町村合併の被害者となってしまったような感がある。

しかしながら、これは児童たちにとって悪い面のみでなく、五井や姉崎という広い地域の人達との交流が広がるなど良い面もあったと思われる。

5 千種海岸への工場の立地と公害問題の発生

(1) 千種海岸の埋立てと工場地帯の造成

昔から自然に恵まれた千種の海は、昭和36～37年に漁業権を放棄し、埋め立て事業が開始された。埋立てにより海が失われた地域には多くの記念碑が建立されている。

はまぐりの碑（五井臨海運動公園）（要約）

『京葉臨海工業地帯として、石油コンビナートの煙突が林立する地帯は太古より内湾漁場として魚介類の豊庫であり私達の祖先は、この無限の海の幸の中に生きて来た。

特に近年海苔の養殖採取は、海辺沖合いに延々櫛比（しっぴ：櫛の歯のように並ぶさま）する海苔しびに無数の小舟が群れ集い、晩秋から冬にかけて此の地方の風物詩であり、又遠浅の海で海水浴や潮干狩又簀立を楽しむ人達が訪れ、観光地として賑い榮えて来た。

戦後我が国の目ざましい経済成長に伴い、関係漁民三、二八四名は漁業権を放棄する事になり、沖合い約4km、面積2,142万㎡は埋立てられて工場用地に造成される事となり、情緒豊かな往時の海辺は近代産業の要地となり、関係漁民の生活も大きく転換されることになった

現代科学の粋を集めた此の工場群の建物の下には今尚生きながら葬られた幾千万の成貝稚貝があり、この供養を通じて併せてこの海に生活して来た私達の先祖の霊を慰めんとするものであります。（昭和四十四年八月 市原市長 鈴木貞一 撰）』

このように『生活の海』であったことを残す碑が、市内に数多く建立されている。これらには、その地域が海苔養殖を中心とした漁業で榮えてきたが、県の発展のため生業の基盤であった海を手放なさざるを得なかった状況などが刻まれている。

記念碑は、神社や公園などに設置されている。

五井大宮神社、岩崎稻荷神社、松ヶ島養老神社（海苔種付け高さ基準標、齋藤海苔翁の碑）、青柳若宮八幡神社（海苔簀功業記）、千種・権現森公園、今津朝山鷲神社、今津朝山春日神社、姉崎妙経寺、姉崎ふじね橋八反甫の碑、椎津八坂神社

(2) 工場の操業開始と公害問題の発生



（はまぐりの碑）

豊かな自然に恵まれた千種の海は、昭和30年代前半に市原市北部から始まった遠浅の海の埋立てによる土地造成の流れを受けて、千種地区の漁協も昭和36～37年には漁業権を放棄した。

埋立て工事は、巨大なサンドポンプにより沖合の海の底を浚渫し、その砂を海水ごと埋立て場所まで運び、海水は海に戻し埋立て工事が完了することになる。このようにしてできた広大な埋立て造成された養老川北岸の五井から袖ヶ浦までの臨海部には、巨大な石油化学コンビナートが形成され、千種地区はそのど真ん中に位置することとなった。



(サンドポンプによる埋立工事)

この埋立てにより、地域の生活を支え、人々の親しんだ遠浅の海は消失してしまった。

また、埋立て工事により浚渫土が採取された東京湾沖合部には、浚渫後に大きな穴（深堀部）ができ、ここに赤潮などで発生した植物プランクトンの死骸が堆積し、これらが分解する過程で、水中の酸素が消費されて無酸素水塊が生成し、魚貝類のへい死など大きな水産被害を及ぼす青潮発生の原因となった。

さらに、このような巨大な工業地帯の造成・操業は、今まで経験したことの無かった大気汚染などの公害が発生し、植物被害が発生するなど大きな社会問題となった。

このような状況は、昭和30年代後半から産業の工業化に伴って発生する公害として四大公害病の発生など全国的に大きな社会問題となった。

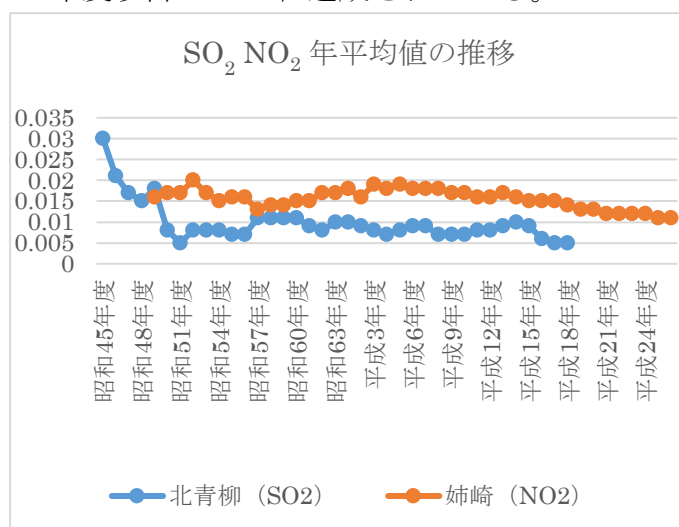
このため、国は公害対策基本法や大気汚染防止法・水質汚濁防止法などの法律を整備した。また、県・市においても条例を整備するなど各種の対策を実施した。さらに、県・市・企業は公害防止協定を締結し、全国的にも大変厳しい公害対策を実施してきた。

その結果、千葉県環境生活部の資料によると、昭和50年代に入ると環境の状況は大幅に改善され、二酸化硫黄に係る環境基準は昭和54年度以降100%達成されている。また、二酸化窒素に係る環境基準についても、平成23年度以降100%達成されている。

図は、二酸化硫黄（SO₂）及び二酸化窒素（NO₂）の年平均値の濃度変化を示したものである。

SO₂は現在廃止されている北青柳測定局のデータで、昭和45年度の測定開始当初は0.03ppmであったものが平成18年度には0.005ppmに減少している。現在の千葉県内測定局の年平均値は0.002ppmに低下している。

これは、規制等の強化とあわせて、立地企業の大変な努力の結果であり、現在は工



場等の固定発生源による公害問題は大幅に改善されている。このような、我が国の公害対策は、中国など依然として公害が問題となっている世界の環境対策の模範となっている。

(参考)

赤潮：東京湾のような閉鎖性海域では、家庭や工場、下水処理場からの排水が流れ込んで海水中の窒素やリンなどの栄養塩が増えると、海水中の植物プランクトンが急速に増殖することがあります。この増殖したプランクトンによって海の色が赤やピンク色に見える現象を赤潮という。

印旛沼や手賀沼などの湖沼では緑色のプランクトン(アオコ)が発生し、水質を悪化させ水道水の悪臭の原因などとなります。

青潮：赤潮の発生で異常に増殖した植物性プランクトンは、ほとんどの場合底層に沈んで堆積し、バクテリアによって分解される。この時に周りの酸素が消費され、底層の海水中の酸素が減少します。この酸素の少ない底層の海水が湧き上がって海の色が青色や緑白色に見える現象を青潮といいます。青潮の中では、魚や貝は酸素が足りないため生きることができません。

市原梨被害：市原特産の梨は、養老川下流の市原・五井・姉崎・海上地区で江戸時代から栽培されていた。

昭和40年5～6月の小雨模様の気象条件で五井新田の梨の花、新葉に被害が発生した。さらに、昭和41年4～6月に開花時の梨の花弁と果実に黒変症状が発生、生育不良・落果などの異常事態が発生した。県・市の調査によると、被害は五井新田・廿五里新田・廿五里・町田・下川原・中谷・金川原・野毛・深城・柏原・白塚・柳原・十五沢・西野・小折の15か所で発生が確認された。さらに、スギ・銀杏・プラタナスなどにも同様の被害が発生した。

原因として、石灰ボルドー液と亜硫酸ガスが作用して被害が発生したとされた。

四大公害病：水俣病、新潟水俣病、イタイイタイ病、四日市ぜんそく

環境基準：公害対策基本法（現在は環境基本法）で、人の健康の保護及び生活環境の保全の上で、維持されることが望ましい基準として、大気、水、土壌、騒音の保全目標として定めたもの。

SO₂ 1時間値の1日平均値が0.04ppm以下であり、かつ1時間値が0.1ppm以下。

NO₂ 1時間値の1日平均値が0.04～0.06ppmのゾーン内またはそれ以下。さらに、千葉県は、下限値の0.04ppmを県環境目標値として設定し、各種対策を実施している。

排出基準：環境基準を守るために、大気汚染防止法や水質汚濁防止法などにより工場等の発生源からの汚染物質の排出を規制する基準。法の基準は全国一律であることから、県や市は法の規制のみで環境基準が守れないと判断したときは、条例により規制を強化できる。

さらに、千葉県では京葉臨海工場地帯では発生源工場が密集していることから、法・条例に加えて公害防止協定（現在は環境保全協定）を県・市・企業の三者協定を締結し、さらに厳しい環境対策を実施している。